特1
帯
1980

和漢諸鳥秘傳錄
同
定餌口傳聞書
全

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

和漢諸鳥秘傳録

目録

一 諸鳥定餌之事
二 諸鳥餌ヲ振り候節之事
三 諸鳥鼻氣筋氣咽氣之事
四 諸鳥身ふくと申病之事
五 小鳥はぐき自ふくとらせざる之事
六 諸鳥嗜かい悪敷き胴いまり之事
七 ゑびまりの節之事
八 諸鳥足氣之事

帝國圖書館藏書
白井氏藏書

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

特1—1980

九　一鼻ひる飛様之事
十　一羽黒飛やう之事
十一　一諸鳥目悪敷ときく之事
十二　一鶴餌付様之事
十三　一郭公飼様之事
十四　一さゝき餌付様之事
十五　一同飛様之事
十六　一諸鳥とよなかる候節之事
十七　一粒餌鳥飼様之事
十八　一早音仕かけやう之事

十九　一諸鳥羽のさき様之事
二十　一粒餌鳥摺餌ニ付セ様之事
二十一　一諸鳥ひけりぬけ候を治ス事
二十二　一鶏のとか腫候節治を法之事
二十三　一諸鳥ニ玉子ヲ餌ニする用候事
二十四　一百舌飼様之事
二十五　一もんさかり之事
二十六　一うさぎの子飛様之事
二十七　一栗鼠飼様之事
二十八　一粒餌鳥水ほかけ不申のんどかわうぬ

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

様之事

二十九　大鳥古鳥ニ成りいこまでもよくまいりいとまごひ取様之事

三十　一元日ニ用之事

三十一　一大鳥類ニより候節之事

三十二　一諸鳥油ニつまい節之事

三十三　一はと病鳥ニ成い時の法之事

三十四　一文鳥病鳥様之事

三十五　一夜さゝき致しい鳥仕様之事

三十六　一嶋鴨子の取様之事

三十七　一相思鳥子の取様之事

三十八　一文鳥鶉鳥ニ而ぶんどく、十姉妹きんまし

産巣の事

三十九　一紅雀八頭黒丸天久産巣之事

四十　一赤ひげ産巣之事

四十一　一黄鳥子の取様之事

四十二　一錦鶏鳥飼様之事

四十三　一音呼子の取様之事

四十四　一九鳥類産巣之事

四十五　一孔雀子の取様之事

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980

ガラス使用

四十六　一鶴子の耳採之事
四十七　一子掲い節之仕採之事
四十八　一嶋鴨相思鳥之類子産兼い節手當之事
四十九　一梅首鳰の子飼立採之事
五十　一杉子林産しい鳥之事
五十一　一巣子又病鳥の心へい様之事
五十二　一大小鳥をかなで諸病を治を法之事
五十三　一伯明散の法之事
五十四　一肉掲粉薬疲労肉從を治を法之事
五十五　一肉癪餌を止て養かくる時は治遠事
五十六　一明欠役引及び筋氣上便を治を法之事
五十七　一兵種打種趾腫毒治を法之事
五十八　一疵薬の法の事
五十九　一四君湯病を治を法之事
六十　一不食を用薬之事但餌取振りい時之如く
六十一　一諸血留の法之事
六十二　一諸鳥蟲出兼い節用薬之事

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

六十三　一諸鳥目腫ル節茶之事
六十四　一諸鳥玉子産悪ク節茶之事
六十五　一諸鳥産巣仕損ケ候節之事
六十六　一諸鳥油掛ケ候節之事
六十七　一諸鳥口氣之法之事
六十八　一諸鳥羽欠之法之事
六十九　一諸鳥脚引之茶之事
七十　一諸鳥血氣之茶之事
七十一　一諸鳥胴息之法之事
七十二　一諸鳥ちりの茶之事
七十三　一諸鳥長寿の茶之事
七十四　一諸鳥つら病の法之事
七十五　一諸鳥胸杯打欠ときの法之事
七十六　一諸鳥頓うもみの法ことごとくれ之事
七十七　一諸鳥ふんづまる節茶之事
七十八　一鶏中風の法之事
七十九　一諸鳥氣塞ぎ節の藥之事
八十　一鶏の病療治之事
八十一　一ちりの茶之事

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

諸鳥定餌覺

一鶯六分餌　但米ノ外糠二外まめ六分青菜ノ見合ノ
但餌入ル盥ニて水濁り不申い候ヘ又かくまち
ハ如斯

一荒鳥餌廿匁ニ六七八分餌ニ餌同
入ル事ハ随分細く粉ニ餌ニ為ス事

一雨菓子ハ蔵ヘ出不申内ハ黄餌ニ為ス餌や
蔵ヘ出余程ハ次第ニ餌ニ為ス筆
掛餌ニ為ス事ニて宜敷御座ハ

一ひよ鳥ニ為ス鶯鳥ニ為ス切ハ大豌豆粉

鳴鴉　何ノ光ノ雀　山雀　四十雀　ゑんざ　田雀
此品ニハ荒鳥又ハ子飼巣ニ共ニ鷲ノ飼方ニ大法
同断ゝ

但鶺鴒鴎ノ内白セキレイハ餌粒ニテモ冥加模
様セキレイハ鶺鴒ノ内ニテモ弱キカ故ニ
おべさせ事ハ鳥ノ内ニテ仕あり

一駒鳥　雲雀　四ツ餌之ごとく　1
之ごとく餌付ケ子ノ内ヨリ青ミ
相思鳥　赤髭　ヒンキ鳥　ヒウン鳥　ヒイニゝ　百舌鳥
カウ　天子

此表ハ駒鳥ノ餌飼ニテ大方冥加

一菊戴鳥
但米計りのおこし　ゑやを匁ニ分右の割ヘ
くるみ一ツ入ル砂糖少ゝくるみ一ツ入ル砂糖少ゝ数十ヒ
日程と飼ふみ込次第ニまるみ少しづゝ入ル事ニ近
青み多くいまゝから

一荒鳥のさゞく　切ニまぜ切ニまぜ
赤きさゞ、ゑづゝ、小カラ千代虫喰　燕鳥　ゑ
なかゝり　賓来鳥
但おこし表ニ書ノ米粉ニ蚕豆の粉少ゝ加ヘ

右粉末を以まくる如く其合せ
こと〻く餌ま付日数十日余を過青み少し
入る青み入れ出てを餌湯室なくて
餌を下け七分餌ぐらい事初め餌付
くを又前の虫を去ぐさせ
一仲法鳥去心志んかくく
紫ささ小杯の麦煮鳥の餌
時鳥の志ろ仁何れを好め者多
右を品叶多の麦の菓子ま
うなきの粉末を以但ま
日数七八日目頃ま巣揚ま
虫の肉多く餌餌・交せ餌ま
いて虫次第ま少しづゝ後餌餌計関割い日ま
日数十二日目頃を以て多なら虫多く餌
おをはず
一藏雁但達摩鳥の薄ム餌時
是を蝉蜻蛉等ら虫杯を甚好
一百舌鳥荒鳥ま米粉ま以ム
ささ入白餌之但百舌鳥の目を
(申程ま隆下事之兼ム鳥百舌鳥
日数七八日目頃ま巣揚ま
虫の肉多く餌餌・交せ餌ま
いて虫次第ま少しづゝ後餌餌計関割い日ま
日数十二日目頃を以て多なら虫多く餌
おをはず
一藏雁但達摩鳥の薄ム餌時
是を蝉蜻蛉等ら虫杯を甚好
一百舌鳥荒鳥ま米粉ま以ム
ささ入白餌之但百舌鳥の目を
(申程ま隆下事之兼ム鳥百舌鳥

又こまやの粉二匁をくるみ入白雪二
青に少とづゝ入る
但菓子を初めより書み出すの白雪を小鳥をとゞませ
ぬ〳〵甚好悦ぶやうにとよるべ
まぶつて以ふる時相止めず又有合節を多くたべ
まぜ〳〵〳〵〳〵招へのたべにたゝ〳〵〳〵〳〵
師まで跡等度の小百雪を鳥有合迎餅多
くたべまぜの〳〵を却而是らい〳〵物まで毎日
しづたべさせふし度追々又ハ夕方時宜の程と
存ず、申至事

一顋白志と青志とのづゝ頭高大き事男顋
赤見山ゑの白松虫
但ゆまし共ふ又とし
右の数何れを柱師ぐゝ中物
多招師子ゑの義ハ三ト師
師子一通り此男通り次第
一真志かわらおぬかゞと紅彩志と共
まゝ出数ゆるとり第ぐり
何れも在明麻と好申ゑまこ師子ゑの共

頂白毛の師子 雪毛但し掛
まつまた白師子 また茶 胡麻生て光しふりかけおまし
一右白師の内へ茶胡麻を交まつと掛師の立へ交
世界ととゝ
一拙花鳥 ぬりまき 筆つぐとも大むくち鳴むま
ふ
雁春
右の新荒鳥師付ふまとくく師付てきみ入ら三
分師二分五厘位まても宜
一カ子 長長鳥 鳴りけを 首玉風 九官 珊瑚鳥
珊瑚鳥 九天九 はく鳥 仙八哥鳥の
頂くく鳥 や

きん 師やがきん
一右付ぬくつぐみ新師 大刀風
も宜
一鴨 碓氷鳥
荒師付ふまとくく入ふの白師ふまとくく師付花
ふ過ての毛みぬまとくく師ふまとくく
信ふまとくく並右鳥ふならぶ八ふ
と一友 ちう小蛇蛛 又をけら拭ふ
師ふまとくく四ふ師ふまとくく
鳴ふまとくく鳥のふまとくく鳥のふまとくく右同断秋鳥

鳥の称をこゝろみるに五分ほど同じ小さ
きまゝにて代金高直成鳥ハ人秩共ほ別て大切ほ養ひ心
かけ宜師ほ勿論ほ候へ共ハ同じ方之依之外ほ無
い鳥ハお知れ候事ならば是ほ方ほとこゝろ師
ほそく吟味可申ほて定師仕ひ
事是ハ何ほこゝろ之ほ在ほ之ほ鍾之強師ほ飼置ほて
ほ師ほ之ほ飼置ほ事者也是ハ名師ほ切者人
并鳥高直ほ之ほ
一黄鳥 菊頭鳥 ヒイチイ 小むく
右ほ之鳥の師同ほなり但菊ほ而品有享

保年中元文の比唐ほ渡り通詞用
大さ雀ほきまほ小程ほる嘴の形状雀の如くほて頸白
く頭黒趙脊尾の上ほ逆毛ほ菊ほ之ほ
ほりの菊頭鳥ほ於ほ称者ほ大
きく頸白く菊毛ほり頭心さし上ほ頭三分一程白ほ頸
三分二程ほ黒ほ脊毛ほ七ほる方ほ四毛ほ白きほる
尾先ほ白ほる毛ほ有右菊頭鳥ほ先年ほ
小さき菊頭鳥ほヒイチイ若ほ
ほ師ほ共宜ほ
一雉子 錦鳥 白鷴鳥

右宮師ハ黍麦モロコシ
申ハ禾水青菜ばれんバ捷ハ
ナシ子飼ヨリ右摺師ニテ伍宜但シ右ノ数ヲ
子抱鶏ハ温キ地ノ候ヘ出シ申ス事ハ
早朝ヨリ剋割申スナレバ別ノ業ヘ出ル事ハ
リ夫マデノ事ニテ暮ヲ過迄毎朝ヨリ拵
置マデヲ別ノ就ヨ出シ飛
ヨリ右摺師ヲ外ヘ入ル
ハ事不申ハ
ハいこき菜ヲ小米又黍引割
右摺師ニ交ゼ堅クほろくニ仕
宜シ米ヲ修結揉迄

シ右摺師之上ニ
ベ付ノ者ヲ其ノ
一面ヨリ日数十日計ヒ置
テ宜シ

一ひらくん 孔雀ノ子抱ト右錦
ヲ宜ほそくらくん孔雀ノ子ヲ右錦ノ子ヲ同
ヒ迄ヲ洗飯ヲ細成ヲ割ニ菜ヲセキ
らくニ申者ヲ孔雀ノ右ノ品ニ何レモ虫多ク
いかをろしからぬ菜ニ秘鳥ノ餌ヲ錦ニ白
人ノ師ニ大方同ニ右ニ孔雀共ヨ

育列て大切なる事

一きゝ共らん鳥小鳥鳥ハ右同様之飼ひて宜
敷共らん者と共ニ子供ハ決ハ未存不申ハ

諸鳥之餌書終

二　諸鳥餌拵振りハ節用器

一摺餌の鳥粒餌の鳥ともにうからし火ほゝ
色かわりハ様子ニて一夜ニ甘草三分右ほうかゝて
水ニ入用ニ

一餌をつゐてゝ内ニよく鳥ハれがたゝふからしニてとも
右ニて治ハゝ白ぎ少し摺餌ニ交ニ

一粒餌の鳥の餌粒ニて小鳥餌入のとき
ハ前ニ甘草ニてからし水ニ用ひてもしなり
不申ハて常ニよく鳥の餌のかとをきり一夜ニさ
とう水ニ付け置ニ日干りハりニ日ニ九餌ニ

いも虫すべて多く入れ不申事又ゝし朽ほれいを用
捨ゐるも拙きなりして砂糖米かし餌まも
用ゝ事也

一虫蛀用ゐる品ゝ口伝有といへども肉引弱き鳥ゝ
ぎ事ゝ用ゐべからず何虫ゝ七ツ蒸ゝ物ゝ
まへ迄十分ゝ用る虫大きなれバ小なるハ
捨申ゝ故也又悪敷ゝ事ゝ切ゝ

一虫何虫ゝ事ゝ舶ゝ事内海先釣虫ゝ事ゝ木の虫米虫粉
の虫但木の中ゝ居ゐ桃の虫茱萸ゝ虫蚊ゐ椎ノ木白木
木ゝ居ゐ虫蜂の巣ゝ居ゐ子杉皮の虫くぢ虫鶏虫
ゝ事ゝ栗の虫ゝ事ゝ者の内ゝ事ゝむら故別て細ゝ
土用ゐぐバ地をまし不鳥駒ゝ珊瑚赤髪ゝ事ゝ
取別て好ゝ申ゐ者ゝ事ゝ

一蟲多飼申ゝ存ゐつゝ数飛の時ゐゝ事ゝ今鳥留
ゐ申ゐ節有合ゝ虫餌ゐや何鳥ゝ事ゝ顔ゝ色ゝ
見ゐて虫餌ゐ加ゐ減ゐ傳

一諸鳥共ゝ下羽ゝ事ゝ病有ゝ鳥心近餌ゝ事ゝ
やぐゝ事ゝ

一餌のこぐゐ能顔色ゝ事ゝ少しの事
ゝ事ゝ

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

魚ともを強て餌虫と飼美喰をなさしめて
（小肉）ものを薬に者右鉢の鳥まで水を煮塩を加へ用ふ
又餌を不食者を有と必ずとを見ハ舌元水を口噛
しるのをみるを所をとくまし二刻程も水まを
換ふ

一猶餌のものに餌を寄ようらしめて右の水
を常に見たゝへ置水も塩水を寄りかへて楊子悪
敷ゝく申事有ときハ速やかに噛餌ふるくも元をの通り七時分噛り餌と美
一猫鳴ばゝん火ふきまき小ねがり

塵ゝ出ざる噌の類の鳥ハ小ゝく餌こ申ふて
（尿）
も肉ゝ一ケゝく杖く油ゝ鳥ゝ通ゝ
（尿）
置面ゝ悪しく共右鉢の鳥地ゝ在着ゝ者
二種ゝ事着迄を余ゝ生ゝ
音出ゝ事ゝなゝ右鉢の鳥ゝ先ゝ
の塩水ゝうゝしを加へゝ餌ゝ
しかへ通ゝ餌ゝ無ゝしつゝ餌ゝ

三　諸鳥ゝ鼻気筋咽気の事

一此類ゝ萬病風ゝ同ゝ
ゝ右同様ゝなゝ

油ぬりてとる鳥ともにぶんじ食ふ

四　諸鳥の身はけもと申病の事

一皮肉の間より風のいなの右まき梅干の黒焼まぶして細き針と糸を通し人の口より右黒焼をぬり付度の如くくれよりくる事を繰返しいく早速治ること无肉へさらぬこと

五　小鳥はこと自分にとりつかせやうの事

一酢と塩とを加へ小鳥の羽少しへ19こ、小鳥の毛目ともにぬりとかめしいれば已ず増ていきうしなどら一夜六夜ともきれざるの事

一毒に在中方ともてはぐきを腐二ものぐさき口臭おこさきり仲の油ぬる事

六　諸鳥ぬきの悪敷ぬ胴ぬきやうじの事

一是れ小痛り強きものこ事中の節早速ぬれ小雀の生血をとりて口を割用る但し雀の爪深く出るこ九白茶用る即ち余毛香き強きもの如自分とらべ和事口を割用るこ九爪を切事

一何ぞなくかるき鳥ぬ籠子の水をふんぜ

入用之
抱て蔵水を色悪敷故何
事相古き竹水の内を墨くる
七 一つまりの節之事
一さゝまりの鳥まるうがらし水又ゝのけ
を以て大黄二分右二品細末
八 諸鳥呉氣之事
一何等鳥にても呉け可申候
て指扣帯を外しはゞもらさ
きり鼻の油股半分下より

可申右様之上に上り毛よ掛
てもさ支もぬり申候得ば
出ハゞ按之油ぬり申しへ治し
し申しふしねて押へ
ゝまゝ分ゝまゝ口傳
九 鼻ひる取様の事
一山雀鳴雀川せみ 但川ぐまともに八
頭深山ぐまともの之 右ぐ
元ぐ右之鳥をぐ一ぱ
内ぐ細ぐぐを出ぐ

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

け前の庭石へ出ておくこと
但し雨天の節は軒下へ取入申すべく候
一 鳥屋の内へ餌箱水入共置候事
但し塩ときの水入置候事
一 鳥屋の内へ引入候節は塩ときの水を宜敷振掛
居候へば引入候節逃出し候事これなく候
一 塩ときの水一寸位の深さに致し置候事
一 鳥屋の内へ引入候節は塩ときの水へ浸し申すべく候
出来候へば不申候
十 引出し取扱ひの事
一 大なる鳥又は鶴ぐらいの鳥は二人にて取扱ひ申すべく候
一 諸鳥共生捕候節は先づ羽交を取り申すべく候

引け居申し候節痛み安き方故ゆるゆると引出し申すべく候
一 諸鳥又は餌を水にとき天気を見合四つ半時より九つ半時頃迄の内出し置くべく候事
十一 諸鳥目悪敷ときの事
一 諸鳥目悪敷時は右の方へ向け一ヶ年程の木の根を土埋の置うえを一
廻し右のまん中へ一ヶ年程の木の根を焼
炭に致しみの葉五枚紅花五匁を茶碗に水一杯を煮
出し煎じ詰候て右のとらし汁を付申す事
但し雨天の節は二日目に取替申すべく候事
一 鳥屋の内へ引入候節は塩ときの水へ浸し申すべく候
出来候へば不申候

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

大きさ鳥ほどもなり多く集まり菜柄圃に左右に通りかゝり味甚よし

一 清鳥と餌澤山なる悪敷七ツ過迄は宜敷一寸位の小魚を餌に可致候へ共東風毎を餌に可致候へ共東風毎を餌にすべからず又入置之右餌翌日捨候を通り

家ハ兄会可申事

十四　きく餌付様之事

一玄米大豆当分合せ粉餌未之刻申ノ下餌生
うすきくるみ玉子黄なかへ餌を入餌申ノ
無之きうり竹輪りけ申ノ餌を白大豆程小丸メ
ならかし餌皿ハ皆申ノ其上へ蜘代ヲヅ上ヶ置三
四度ととべ申ノ其後蜘の走りをくぶし餌の上
へ取り付置ノ右をはみやめノ色ニ成餌を喰ヤ
ノ申ノ心ニ而ハ餌申ノ十月ニ成候ハヽ青みがし

付易く秋ハ餌付かくる
尾切いて餌付の事
六十羽数ハ
十六　猪鳥
一猪鳥ハ
かぶらをいて猫又下餌
の如くまもる
つくし餌
ハ餌ハいても羽
ハ玉子の黄
申しの如くそはかとひのてふうく移し
泊ふに傳ふ
さいハ日ニ秋冷募申の
世節大難所と
十七　粒餌鳥餌様
一つぶ餌鳥何
水餌ニ取
節つぶくそ
い餌餌を兼
べきせ又ハ餌を

飼易くいたしやすく又病なき
ゆゑ早くとれ

附

唐鳥牡牝鳥を揃へまして飼ひ
其又鳥の数ふえを食ふ口
みい事多くの世話へ心づる
なくとも先鳥まもり飼ひ
くらふべし先趣向まも仕
吾家なる依て牡飼は
り飼まじきのみならず飼
て揃飼そろいの方
根つまりいるばかり難
も花へ粟小米いの
十八　早音仕かけ様の事
一鴛鴦駒鳥鶉共に音鳥は赤
くり五六寸時迄とさし火
二通り過いへ音なき申仕
びを引申ハ春ハ女子ハ
くらゐ程申ハ寒ハ十ハ
し火ゆり入いへ音なき申ハ
て揃飼そろいの方
根つまりいるばかり難
も花へ粟小米いの
十八　早音仕かけ様の事
一鴛鴦駒鳥鶉共に音鳥は赤
くり五六寸時迄とさし火
二通り過いへ音なき申仕
びを引申ハ春ハ女子ハ
くらゐ程申ハ寒ハ十ハ
し火ゆり入いへ音なき申ハ

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

引いへ一緒ニ立ち申すべく候事

設有之事

十九　諸鳥引の羽うら鳥引の羽ニ而ハ片羽をとり申内の小羽をとり

一処ニて鳥ハ片羽をとり申内の小羽をとり

外の小羽ハ助け申候事

外の小羽を切ハ

ハ鳥ハ飛ぶ事不叶候ニ付

風吹ハ鳥も飛事ハ不叶候ニ付

鳥ハ飛申候

但雁を立居いてつぐ様ニ

合点仕申候事

菊戴き元ながら一つ

行ハ方冥し夜中泊の節を一所ニ集り友

七ツ有ハ

諸鳥雨鳥ハ焼ハ手ニ

但是ハ学ハてハ不叶

其生ハ事ニ

孔雀白鳩鶏ハの子の

いたし一向ニ立ニ

き方ニ

行ハて来月ニ

菊戴き元ながら一つ申ハ武

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号　特1-1980
ガラス使用

但うけりやうのなどこまり好と出る事
此病元は食此ものを食しゆゑ節制出る病こさまな
くても先よくなし

廿二　鵞鳥のやきもの注此者ぶつく
と腹中しい事治をも

一塩湯をよく洗其跡へ松とまり草の油みいぼ
の上ゟ付申ぐるしく但蚓の中の土抔付申いゟ
でゟ有

當をまり有来の頃中でも貴人出し好申い其節
いまる始貴体まらぬ病掛ゟ而ゟ下痢をまる早
くおさまり仕廻せ事い方冥途の一草
秋土ゟを付好申いよりも安きまりいへ鳥ハ
おそろしい事申い事

上方ゟり下し申い附子當ゟと貴人ゟさ
り上ゟ過のいハト云病ゟ之を治をまり
口傳あり

又ゟこゟり事ゟふんを洗ひ不自由せてむ
しゆうゟ過ゟ安心ゟ里へいろゟと毛抜ゟと
申い

平在類抔ゟまる師付ゟ多申いそのけ様

傳之

二三　猪鳥を玉子下痢を用ゐる事

一兎を下痢つかれと労れて心ろへ遠かちの
共實衰なりゐへ共下痢つよくまくるゐ性こ
こちを回復なり

但六分餌のうちまかく頃ろてを病出不申玉
子ハ下痢重下痢つよくまくるゐへ心病出申ゐ衰弱て
者へ重ゐ

死産こちんちんハ
此三種ゐ事迄もあんへんへ申ゐ

但し書之事ゐ重ゐ申難くゐ先ゐへくゐ事之
口傳之

二四　百舌鳥飼立の事

一労ゐ餌冥ゐ日ゐ朝晩ゐ物体なへさせゐよ
と也二日ゐ餌ゐハ馬ゐ目まぶけ労
物用餌音ゐ肉餌ゐこべさせゐて脾胃爲
こちゐ基ゐ悪敷ゐ物馬業用ゐ格別労ゐ肉へ
用不申事之

二五　狆のさうし之事

一、さうし事ゐ二夜ゐへ共一夜ゐみゐも有之ゐか

志賀の日をを二十一日めよ子産や日の仔まいか
二日めまい彩のこの内二便共毎丈まいやいて
はそい母丈ま付事置ま産い人手より喰こ仔こ
て能程ま二日おろし二便の通じまの申程こ
ふんじ仔こまかきらいやい事之

附

まそぐてや内いうすき匂まけまなしや豆めしと
くいせ中いる虫生後虫乳有こて春と彩こと
くいせいへ虫通じ早くおこもや申い虫通じまお
りいへ脇ま喰廿く彩こへ仔こまや脇大きくなま

やい右こへ虫そぐちやいまく虫通しい仔ま母子
こ春ま彩こまくまや子い子白目へくり土蚊喰ふお
しくい此節なぐまや此ま伝あり
事子まて之んの子凡猿之事
四才以上ハオ以下十四五までの子ふ
二六 うまぎはまるの取猿之事
一合い仔後手林産の節こまりい(い母ありく毛
おくい彩こ中いまま男うまきまを引放し事
此一所まみ里まて男うまきまい生こいて子なふ
升はぶしや事春こい二十日も日数立ふて子引は

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

なし申し又はんてんいさかを出すなりこれも青葉
好きこべいへ共時ならざる事申し
但子蔓いの節くらを取りし又春の子は三十日も
過てへばきらびこべやはいたく其まゝにてこぶおりいたら
実領ときらびて又いと茶から水を不用
二七　栗栗飼猟之事
一かな綱こぶへ食中は椎の実のくりの新なべさせ申し
むかへ捨てきりへ松用いる事冥加の
のこけなんとくさくべやはい
引き寄時花の所

京、奈良、大坂、
此地西国にて時花といふ
ものは白いきくらいやれ
きくのうち用申し一ツ先ず
いまり
尾張名古屋の河岸より申所のごとく是をきり
上げさせいきり候小菜ぶりきの本大根、の葉少う
なしの葉ぢ用申し事のきし本曽路小瀬小原の
辺にて小松なる目向の新なるいめしの取湯大
豆の粉松れなべさせ申いたし

二八　粒餌を水にかけ不申のんどかわかね
猫の事

一のんどかき切ほし須ふまりいほ弁の如くまて
有之せんとそん所に水入申心とく呑ほし後
則ち所にいる事多いかんうの節俄に水入と入不申
いかなるふへき共水にかけつきのんどへつつて届
ぎ様なのまた中に筆をも右の如く引し呑せて
ても気ずもとうくちうにて水とつかぬ心そのま
ま居事

二九　大鳥古鳥を成りにへば其記へまぎれかけなる
いとき取扱の事

一共節取扱に為慣ながら此申に湯を洗申のごな
只今五三度も仕らしいへい心とくとれ中に其跡ゑ
のぼりつめ中の事

剤法甘草取扱口傳仕り

三〇　えぶま中下用之事

一当の如くなる事をえ是は十四まで、ごんとくな
のごとき節十日はぜの間飼ふ頃を及ずむ条
と存ぎ申下用てきらい節之事

三一　大鳥新ぎらり

一大鳥病ることなくして肉落氣脈衰へ餌
進ることなき事有之候節は一共右の
如く餌を拵へ又は進めまたがやかに喰事
出し置一ハ拵更氣附ることなくして
また元のおし拂ひ不心付申間敷
病ある時師の仕樣口傳之事

三二 猪鳥油かすといふ節
一猪鳥油かすと云ふる月代まとすり鉢の
へ入ることをいとまなくいかほども油分なと引け由の條
秘ことに可

綱掛おし鵜餌付いはやうまで委しく記す事
いかゝの木ハ實考ハ申ハ肉上至
但考への實文猫ハ申ハ
三三 はまと鵜鳥ハまと時の法の事
一鵜病ることなくしてみそかなる
能ハ拵することなきを耶とかまハ一大能ハ志かし
目へかゝりて六ヶ敷ハ事
三四 多る病氣の事
一文鳥病ることの節嘴赤く白くなるといふ、療治さ

…共紫と白くなる…

一 庭鳥の卵 裏中ゟすけ致とまるの…
…見えぬほどまもれい事 ま…有之…
…塩茶ま…渋ひこ…

一 鷺…ま…て…
音出しいて水ひをかけ
冬水を切置ていて六七
水ひ申い何れも
…の前ま水ひ
…

三五 夜ま…
…

一 夜ま…鳥ま…
…夜ま…
寒くなる…吹ひ亜ま事

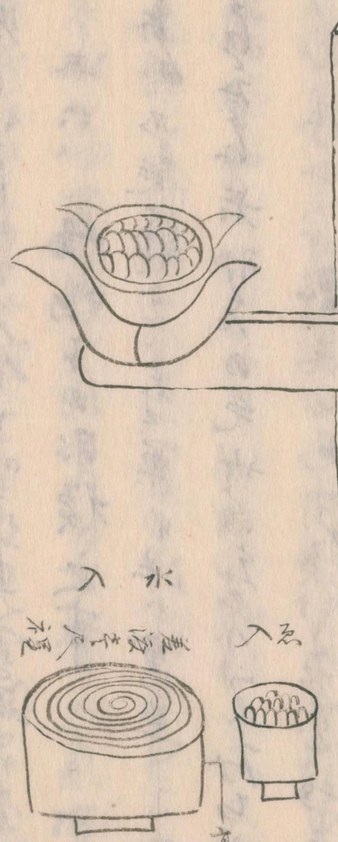
三六 嶋鴨子の形模之事

一 嶋鴨雄雌ま…
ま…若狭の先世…
くく干いへ野老の毛同様ま…
又ハ…老ま…
…

一 右嶋鴨の儀ハ…

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

事ありて嶋放しいて差度一寸八分の鉢
に生ぐすり石りを入置ふくばおんめんとを吹き砂利を
入いて嶋場置候処鉢の内へ水入候へば
嶋鴫巣龍



論

相放しいて時々八十八迄かせは程ゝ前ゝ先雄雌を
まもるごとくゝ羽ばたのさせ十日程も差置ふて
又雄を揚げ又雌を放し是又ゝくゝ羽ばたのさせ
置ふてまた雌雄共一所ゝまもし申ふ最
放しいてつゝ入置ふて庭龍の体を
くゝ足先申ふ時々雄を雌
の状き叫ぶ入置ふ上庭出へをくゝまもし
いつゝ巣の外翌申ふ怪我勿事を注意して
右ゝ通ゝ致ゝ
飼置ゝ平日五ゝ飼ゝ庭

蒜へ放し節ハ常ニ倍ヲ加ヘ又平日六ケ月
て飼ふ時ハ其割ヲ以テ先ツ初度ハ産ヲ
くんでハさかり強き物ヲ選ミ雄雌ヲ
い
産蚕ヲ取ニハ其上毛ヲ取立ヤハ事ニ
ハ益ヲ得事甲ニ候右ノ蚯蚓三百ヲ入ル宜
ヲ汁ヲ取ル事ニ候又寒ヲ防ク事
物ヲ整候然共平日ノ如ク
日迄ヲ限リ置ニ候

むる事也ゆへに初二ケ度ハ日数五六日ヲ
と薬ヲ以ハ中ニ右ノ薬ヲ加ヲ
てなるべく其日数十二三日ヲ
む其前ヲ先ニ拾蚯ヲ申ノ
用ニ候ニ三十頭ヅヽ
みてかりそめ
ハこれまでのごとく
ヲ取ル事ニ候右薬ハ
ヲ取ル事ニ候
り込ノ物ヲ産ヲ
日数三日程ノ間蚯ヲ

産毛ある内は日数の外に寸法の
定無頭そろう右のごとき時の所をもの子をツに付五
ツ程に積ろに入
翌朝右の子体産毛ばかりそのゆぶを揚ケて
置ば右ものを放ち事生の左ばかり又二番巣に
初掛り申初より産の右揚ケ子さしべらとりて
長き八九寸位（如此巻らして昼六時の
内よりも出ざる様に摺餌五ツ日数三ツ程を
餌五ツ程ずつ
与ふべし此頃の子のさしかた等人数を

此ころづゝ餌おきく住ケて餌立ぬ事ゆゑ古産の
を餌おしひかれ叶ふ是ハ古巣を合せて育ハ然
共ちいさき内ハまく餌の
てを口を明ますれ初ケを見ながら餌をさし
ハ空ふくらみ時候ハ餌立者ゆゑ
事
日数三日ほどもおき立ハ餌指に摺餌と
少し砂糖入ケまく住ケ此餌ハ古巣に
きせ右の餌喰ハ初ケまもれかゝりても見ハ事よ
和ぶ者よ一七日産ケまく依て右のさし餌の儀

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

一鹿ハ就まるきの木を枯なし
ハ、志のしなるゟ右の枝末斗まそ〻ぬを
みて申

相思島産巢之事

右の雨ふりそうなる時ハ雄雌ともに
雨ふりそうなるとて雄ハ雌をおひ
雌ハ雄をおひ雨ふりそうなるとて
入日くれ雨ふるの島雨ふりそうなる
ときし雌雄を喰ふ雨ふりそうなら
ときし雄を雌へ右の子を
ゟきし雌雄ともに雨ふりそうなる

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号　特1-1980　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980　ガラス使用

右之通之薬草を取合へ申いれ候木ノ薬之組申事

三八　文鳥鶸鳥其外とく十時ゟきんぐと産薬の事

一右のゟい枝木ゟ入てゟ古巣ゟ入てゟ宜敷なくゟ入てゟ宜敷なく
い産前ゟ敷しい敷ゟへゟ右のゟ二羽雄草ゟ入糸五
今右之薬ゟ用ゟ右へゟそ生宜敷ゟ糸の光彼
時十ゟ過ゟて雌ゟ敷し敷ゟ言産ゟ話ゟとゟなく
ゟ雄ゟ敷しゟい雄今敷思今ゟめんゟ
薬をゟび玉子敷産捨ゟて女薬ゟ申ゟて一
日ゟ夜づゟ師を食ゟ出ゟ節師ゟ根ゟ大き
ゟふんをゟ入ゟへゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟ

又雄敷ゟ産ゟ入ゟ女鳥ゟ産ゟ入ゟ産ゟ
一ゟ事ゟ産ゟ節雄鳥ゟ話ゟ産ゟ
高汁弐三敷ゟ敷ゟ放しゟい右ゟへ巣へ
ゟ通ひゟく産ゟ宜しく産ゟ程ゟく関割
ゟ根ゟ切ゟて雄ゟ二羽敷ゟ共ゟ師
ゟ敷ゟへゟ敷ゟ産ゟ又巣ゟ産ゟ
ゟゟゟ話ゟ敷ゟ産ゟ
ゟ事師ゟ産敷へ敷しゟて
ゟゟ入ゟ又ゟ薬種ゟ根宜ゟ
ゟ産ゟ産ゟ

りうて侭と赤の皮をもう又小粒をくるせ右三品一石ふや
がしいてからくやいたらくやいたらくハ子こと早く成長 新申いたも秋
八右のもう納所十月七十四五日もまくま迄送いたやい子
菓ともと出まして廿日余りもなりくハ来月二海好候ハ
いたやい駅馬又ハ飛脚ニて早速志ら仕申もの也
紅葉ハ前書の通ニて葉稚谷草閑斎のし
とくさんかい蛾五三も珍くさせやいかく花好候
ニ木ハ梁の外ハとくくさもうい薄か弟の教うへ
いて珠の外記載候ハ前書の

一右両島の菓ハ何ニも不依うへ木を植泊木ハ島のみ
なきのニ候し菓ニ而ハ両島ニ木のうち西方ニ里ニからく
菓ハ外ニよき所ニ而ハ稀又彼所十日過ニハ枝しまい

三九　歌島、黒九天久産菓の事

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』 請求記号 特1-1980
ガラス使用

事前也子もや以前の通り片すみの方の内を刻かぶ
男女二百九拾人計にて又ニ相残しおいへいむすめしくなるも
和菓草紙ニ包ら材打三寸程ニ切其ことも方の毛、左
かろの毛、うく〳〵巣ニ生しやいまし事疵と考申い事欠刻いハ
十二四日と相りまい前出まも申い通り二日もまくとも捨
蛇入置てハいハ欠刻ハいつ日数中三百程章おいて揚け
いた右の子を全程成長致しまし育うく味左の走ともま
一、秋もまし元がそれハいて出けちび事ハ事も
いつ第一ふとまわくは放ておいて巣和の内まて落ち
事いへいはきおいて傾斜まとび事ハ事ハ

へ左ニ新の紙まて子の尊ハきく定のもし右のまおち
ハ釈当吟面しおいて外へ捨ハ物ニ在く強り
のそくそくニおいてと落ハいた子なかきこみ酒をとび事
ハ事は左まま事ハ字通子和揚ケ大針程の毛の先ニきま
いた毛又ハぐそく羽ニかりい時揚け申節紙ハこへハいハ早
速ハしらきハ者之御座ハきおくこぶかと存ることまて
ハ右の子ハくまきハいた者ニおいて是ハさしい節ハ
ハ心行ハ事ハ左ハ前書の通りさ一傾の事ハきら
虫とまり餌とまし文ニ改ハ事ハ傾の儀ハ四五日の間
常ふまて宜ハ左ハ日ハ過てハ今又ハ六段と引下け

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

四ツ合三分迄ニ下け置度事
又ハ秋ニ至ル迄ニ

四ツ　赤ゐげの事

一赤髯を龍ハ入る節ハ前書の通り木ゞ植ゑて宜
ハ産ニ薬草ゑと木のうろ又ハ巣草ハ
事ありところハ毛右両ふさ
ゝ合体致ゐハ手が
追つ免頭ゑを殊の外つよ
強時ハ雄鳥をおもひつゐんの事
ゑそのときかゝることハ龍と仕ゐ
右ゑき方へ蚓五ツ程づゝ
食へさゑをうり同様ニ致置
子ゑ巳申ハ三月ニ致ハ
ばゞ其節雄鳥を
い事も有之候又雨鳥共中
事ゟ冥土ゑ前書之通捨蛸ニ致
候前出之通ニ
事ハ餌ハ二日ニ
餌ハ十二日迄死を頭け置
く餌の儀ハ六ツ
宜敷ハ
餌ハ
餌ハ

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号　特1-1980

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号　特1-1980　ガラス使用

中をとをきやの虫をえらべさせ
きり又んの三ぶ一ぱいきりきせまこうちゃの白焼少しづ
きり合せいろ飼ふ事なり於又きをなりいて右の餌
らべさせいへいをときから宜事第一雌鳥の頬ひげ
なをへいへ右の雄の雌の中仕切を明け雄を一所に放し此鳥
きさより同様すきりいへいへめんをいへ仕越をめんの屋と
ふまへきの通りの物をこれ雄しいへいへ雌の頭
とつきやねにてかせいでいふありいて中にえんをと
らせ分け不申いへいへ此鳥に生ず凡三夜づ
もよかりいへいへ右の玉子をセツハいと毎日て又お

んをへ物をこのいへ又つづいて右申ごとく一両日を
おけ休ミ其上又おんをへつてまかりかの事
一右まよかへさせて飼ていへ鶏のよくく巣に仕し鳥を吟味
し取いみんかぶへなり共へいへ玉子をなこへ入させやいへ事
凡日数廿二三日の内に開ける物にいへ割りてとをた右の
鶏に一日二日をとらんさせ申ごとくいへ仕越をきり頭へきり
元をとり米黍を細割りて又食をまておうふりうごきと
是又まをなべさせ申ごとくいへ幸校又きの虫のいろとも色の赤をた
いませ弟に申ておまよきみをなべさせ申ごとくいへ事赤かまきみ虫
のまきみをきらいへていへべさせいへ事赤をり右鶏物をり

九十九里濱ニ多シ　事重ニ
白鵬　唐鴨　高瀬雉子
右何レモ錦鶏ノ風ニ準ス事ニ
四三　音呼子ノ取様ノ事
一雪ノ夜ナドニ庭ニ雀ノ居ル所ノ穴
ノ内ヨリ呼ヒ出ス木ノ実ノ大サナル箱ヲ入口
巣ノ様ニ拵ヒ置ケバ雀ノ入ルヲ待テ
ソロリト蓋ヲ閉ヂ取ルナリ
巣章ハ種先ノモトヨリ檜皮右ニ下ヲ巣草ニ致シ在
籠ヘ放シ置ケバ冥ノ内ニ巣ヲ作ルナリ
しなどき生業ヲ妨ケ候ヲ禁ゼラルベキ事

山事巣組ノ事ニ付テ依
之餌ヲ食ヒ音呼ニ出ル事ヲ考ミ、放鳥ノ皮ヲ用ヒ巣ヲ
しまる西ノ如ナル事ヲ考ヒ出ス事ヲ
ヤハ事ヲ考ヒ出ス事ヲ
となし少ク青菜ノ汁ヲ
宜敷事ヲ　二巻ニ
音ヲ聞ケバ
ソロリト蓋ヲ閉ヂ取ルナリ
ソロリト蓋ヲ閉ヂ取ルナリ
ソロリト蓋ヲ閉ヂ取ルナリ

鳩、自子ばと、尺ばと、きんばと、右鳩毒説の條
に詳にす宜敷いむがん、前条にしるすごとく
ほして黍黒三品交せて細末
飯平生ならべ又ハ元宵をはじめ
んさかりのころ交ハいりこかし
ねとりて用ゐ事菓ものげ扨の
夜宮玉子菓なくハくりゐ十八九日ころより出
菓に付て二十二日頃迄尺余の
玉をとり二ても菓は成ともとる事
四五 孔雀の子取様之事

一孔雀を中より上ハ粟、米糀、皮ともに、モロコシ、アラ
キ、西瓜種、小豆、よく煮て砂糖かまぜ
り交平を三ツほど飼ひて玉る一
又ハ白うに兎しるくきなる虫
ふ事

雄雌共室中ふと顔を見合らば
きかりの節こせきく女鳥を男鳥のもとへ出し事
出ル時ハ男鳥ハ女鳥ニ付て又ニ百、
置て女鳥をとられぬ様ニせハ
出ル女鳥ハ雨方余程ニ

女鳥ハ伏し男鳥いとゞくをかけつゞき申し女鳥ちやうこ
けいの如く男をうみとゞり込つて女鳥の頭かぞをつき
女鳥こりやいかゞいたいか七ツ八ツ迄又ナヽツ十二とをこ
の数少しも寄ざる事なく寄ればかならず雄雌ともに
いまだまことの一ツ男鳥志ことが半腹にとゞかい男鳥
きりゝ行ぬいきをぬいてかうべをたれて二ツ
尾をまき込くらかとりあへず申し
一まつ〳〵猶おまなかうしも教しゝ女
鳥おだやかしゝ事なく鳥の玉るうく頃を
刻限を定めえうばこたゝ
行水抔をさせ身をうわがせもとゝ頃なく
なかしゝ事だがいて日数三七日ばかりの
日よりくいとまをたべ
かくて先日ゝ毎鳥のふとゝろまでし置翌日ゝ毎
鳥にうらうらと所身ふじまうの
子のお入及しゝ位を行けれてうらう
とうの事まをして寄をりあい五六ト住やう頃ゝ小来
引とりをしゝ女をうらうらとうらうらと菜ばちゝ不取ゝ事
ま入師の中ゝ子のまゝ不申ゝ

小き蚓右の如くの上へ置て右の虫うごかざる
ほどみん時ハ小きくさびやうきら虫細かた
虫の如くにて人参の根、せうきやう
事をなす虫の事ハ平生どこにや
り五合もかくれ居て時ハ雷雨ハ
さもいとう虫ハ雨天を待ちかまへ
バをして雨ふり雷なりいよいよさかん
十四五日迄に一番子取しこれ
一栗草おいまとしもしなどを植ゑく地面を三尺四方ばかり九
く土俵の様に築固め取まわりを

一右鳥兎の飼水につけとびやうきら虫細かた
鰹などみん時ハ小きくさびやうきら虫細かた
虫の如くにて人参の根、せうきやう
事をなす虫の事ハ平生どこにや
り五合もかくれ居て時ハ雷雨ハ
さもいとう虫ハ雨天を待ちかまへ
バをして雨ふり雷なりいよいよさかん
十四五日迄に一番子取しこれ
一栗草おいまとしもしなどを植ゑく地面を三尺四方ばかり九
く土俵の様に築固め取まわりを

一右鳥兎の飼水につけ
鰹などみん時ハ小きくさびやうきら虫細かた
虫の如くにて人参の根、せうきやう
事をなす虫の事ハ平生どこにや
り五合もかくれ居て時ハ雷雨ハ
さもいとう虫ハ雨天を待ちかまへ
バをして雨ふり雷なりいよいよさかん
十四五日迄に一番子取しこれ
一栗草おいまとしもしなどを植ゑく地面を三尺四方ばかり九
く土俵の様に築固め取まわりを

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

寿ること薬方ありて、其場せ
夜るとなく昼ること事
これをさがさらんとて夜昼
とり昇ること
いろは三十四五日をかくる者
を深山の角宅を設しおくべし事
人こゝろ善にして右の
を守をらくにて祝ふ
一番さかりを取させ時は右
入日山へ又さかりは一番に遠

申ハ勿論一ばんとり二番ハ至極
て弥の外ひてまくら遠と
き断ら中ゐをとりどふりを
冥婆右ど堀ま
ハ右志やうぬの根をこがし
生那産、ちう産、神王産
右頭ごと同じ
部産きんけハおるゐさせ
これのつきぬ前
一熱と有こと甚強

又油鳥も冥白

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

雪まで毛こなき間ハ水なき時ハ百羽三四ツ
雪ふりて次水升して饌室ニ
居雪まで二三日前ハ両羽下り脊高く
なりてよく喰ハ丸煮
小日ニハ一入羽下りて七ツまで
四七 子揚の節仕様之事
一菓子右之日数ふそくまゝ
ちゐさきを元一所ニ大皿ニ
いろ大きくちいさ子ニ
ねをそへ盛くる事

四八 嶋鴫相思鳥の事

一母鳥玉子を産ん子息合ハ
大菓の内ニ船息合ハと
大切におさく手の上ニてゐるを
如くニてを産かゝ追ニ
小指ニて下腹へ心ざしかゝ
ゆびくちまるとゆびくやべ
ゆきまるとゆびくやべ
ゆき玉子から砂ニ
致置事

四九　梅首鶏の子飼立様之事

一玉子ハ鶏ニ成しかけを能く又野ニ夏刻子とり出て夜中抱庭鳥のごとくニ入ハ子七ハ日も野ニ育立て庭鳥ハ黒鳥の母ニ而ハなけれ共子の如く飼ハ不申ハ母鳥おゑんいてそだつ事くへども飼立ハ第一いたわりて鳥同立の如くさし餌を致ハ赤ざし小魚のむきみの如く口なをきりいさざなく一寸取ミぢんきりの節ハ手水摘ニ水をくみ置て入ル事申ハ餌をさし入ル事ハ不申候ハ餌致とらざる内ハ珠の外ニ

なり申ハ人多ク而ハ餌ニ困り申候事

育立ハ八子餌と八不申候ハ餌ニ困り申事

五〇　秋子を産鳥の事

一鳥、べきまる、十時味、だんとく、ひやが多ク雀、碧鳥、きんとら、銀鳩、せきれい、ほゝじろ、長生鳥

右之類ハ四季子ハ産ミ共ニ巣いたし出入口高く付て子ハ出入ハ子ハ有り出ざる様ニ

五一　巣子又ハ鳥の心へ様之事

一巣子又ハ鳥の成長そだち候ハんじやくの如く手ぢかニ致ス事

もらひそだて其中ハ鳥を飼ニ人の心ハ鳥の中ニ入ル事

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号　特1-1980　　ガラス使用

菓子饅頭ハ大口ニ二口ぐらいにして八九文ぞ
宜敷い程こしらへ菓子ふくさし頃数ハ同様ぞを定
こぶるまさしきもの一ツ押かぶせ数頃・なりい事
是時ハ五六文位ぞ事

五二　大小鳥とらふぐ諸病を治ス

一人参　一實門　一茯苓　一竜蝦　一班蝥
一硼砂　一國老　名茅方焼返し用ユ
右七味ハ末ニて氷合せ一倍天花粉をまぜ
洞を
底砂をふるかけて桃色菜ぞ気付粉末熟とさま

す
青黛少しかけて青菜とも名ゑ萬病相菜也
水出の上時ゑ焼くしのゑ膏かけて右ゑ和ヨこて
喰頃まぶしゑて
右七味ハ菜種名菜研こて能く細末ゑして水に浮
こて飼又右三品の加味ハ何れも目方ハ右方七味の
菜種のまんで極く三分一加そしたとくむ事三年
目ならバかゝ味ゑまん六七分ふるも右砂黄盛右
膏の内一包ぐ加ゑ事ぞ
但喰頃ニ入ゑと何れとも水にてぼかして飼事

五三　白朋散　治の事

一人參 三分　一茯苓 七分　一山藷 三分一
一薏珠子 七分　一白朮 二分　一貝母 二分
一草金鈴 一分　一腦砂 一分　一國老 一分

燒過て用る

熟強を一角かゝり長さ三寸ばかりに人參を除て大黄加へ搗末一二分宛湯にて服して水よほどて飼又右九味各末にして服して水よほどて飼又大黄加へ搗末人參と引替る事

五四　肉揚末　某瘡勞肉腐を治る法之事

一神砂 人參 一白犀角 一白朮 各等分 一茯苓 一菖蒲 一貝母 一生猿肥 各中 一白芍藥 一黄蘗 一薏珠子 一山藷 一草 金鈴 一楊梁 各等 一甘艸 (黒牽牛子)

右末して用る事 七五三肉を補ひ肌潤ひ

右各如法して能く細末して水よほどて用る名水云事を證に各四一と云一服と云事を上に記すを三某種に名づく二夜でなら以又更に下に各歩ト記し肯之某種に名

一款如下裡づゝ之多少共此割を以まきを下の条々記
しるすも皆（皆）是を做ふべし

五五　肉癰甘餌おとして養ふべき法之事

一神仙、一山著話、一蒼朮子　各中　一自伏苓大一草金鈴
一國老　各少

右持て用る事七如ニ屎乱ハ則臭少しけし中
と称ひ氣をまきをとのぐるとも
右各等細味して能ク甲蔵ふるい水まぜて用るも
屎乱と小薫の如くなるときを云又臭ひかゝる目方
白朮等の加減目方と同じ

五六　肉月次役引及び筋氣上腰を治を法之事

一血箋、一白蔕、一神寶黒焼、一水銀郎　各中　一麒麟血
一辰砂　各中

右末して用る事七如ニ水よろぼて用ゆべし
右各等細末して能ク持て筋氣ト脊ハ首曲り動を神
ハ羽体痛め下へまけ邪ハ上ハ陽ハ陰ハ陰ハ陽ハ
を引違へ折ゆる事ニ筋ハ股曳と小股
共首を通す事ニ而此病多ハ鶏ハと有上腰と小右ニ
の痛頃す鳥の脊中の脈事音声を治せる右ニ
小自然と直る之

五七　兵種打疫神治之法之事

一桂角、一天南星、一桂心、一雄黄、鶏冠
一雚角、一黄芩各半、一乳香、一石灰水飛、一没药、一猿骨
各三下

右搗末、猪の肉少しかへはこべの汁を以和し
けんこうる石一葉ほどを塗ること愈ざる事なし
臍界甘草をかみ猿活せざる時　附子をかみ
とも活せさる不平針を以て徹こうる所をたゝさき
うす血はやりて大針まて其血此に當梅肉を附其
足好包巻ハ則熟痒を発しても喰ことなる

但平針ハ手き外療の特針や大きてい火まて焼あ
そめるもの也

一右某谷某研まて能と指を又右の如味を前条有之
ハ未目方と同断こ其肉卅匁ハ隨分少しもし六七分一
位かてきし又是は包まくとハやなぎの皮
てまくこと右某を柳の皮裏のかくの如き長を色事
ときこ尤包こと上好細き糸まて事里こ此如ら
里ハ事こ寄下ら熟を発しかなる牡蛎
喘まて喰破の事有まりなから是いとくふなら
又具味へ呑けこと

五八　疵茶の法の事

一挽茶一盞四、五個子一黄柏一ふ一甘艸か
但紙上におひて火あふり色付し
右拂て水碗に入て
梅肉を白色數、此茶を付へし
右茶やぶれて能と細末にすべし又此茶梅ぼし肉
ぬり付てよし

五九　四君湯　萬病治法の事

一人參　一白朮　一茯苓
右三品各等分甘草少し

但甘草を入四湯ニ
一半夏　此茶をかへりウク
ニトウト心得べし　一天花粉肉を消を

六六　石南木用茶之事

一蓮肉　名當ル　但し餌ばかりの節用ル
右何れをやぶんにて能し細末にして水に煮て飲人
參白朮茯苓甘草　天花粉よ
肉ハ白をふりの前かいてよし　何れも當ル
諸鳥疵茶

一麒麟血　一百草一ちかの油一玉子白ヲ
右四味各等分之末きめんけつる草能く拌して

ぜの油 まその白みそ 右り合せ付ル

六一 諸鳥血留之法之事

一 柱心一ハ少ハり一きるん血

右末し一ヶ月

右諸鳥血留る節前かゞみ切
ハり揚梅の間皮又ハおくまてまて申事
右名のごんまし能く末しておつけるゝ又水なてねり付
ととゝゝし

六二 諸鳥さゝり出血留る節用茶之事

一赤ゝし 黒焼 一ふ
一ぼたん皮 一ふ

右三味水入て飼又ハ右名のごんまし能く末しておつけるゝ又水なてねり付
右名茶碗ゝ細末して水なてねり付ル

六三 諸鳥目腫の節茶之事

一水楽ノ根 摺水にても煎ふくめ

右摺本ゝし甚汁を煮ぼり目洗ふ又右名の
ごんの水仙の根許麻の袋ゝ入ル
一白末せり根かつら

右煎本ゝし右名の汁ゝ入まのい五日
くゝりつけまゝ置節ハ右名のごんまし能く末しておつけるゝ又水なてねり付
ととゝゝし

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

六四　諸鳥卵産前後用薬之事

一角ヲ一人参同一分一日根草一匁

右四味せんじ用

又鶏油ヲ匁の油の内ヲ去蓮葉ヲ以湯ニ

入其味ヲとらんとする事

右各等の炭末のごとくせんじ

のむ事

六五　諸鳥産前後仕掛ヲ揉之事　寛中引改々見合可餉事

一人参一匁三分　一甘草一匁　一楊梅皮二ト

六六　諸鳥油ヲ掛ケ卵ヲ揉之事

一ねうの木のこ一ウドノ実一神ノ実一とうがらし水

右四味各細末にし餉ニまぜ鳥ニおりじ乍ら

右各等やきんとして細末

ふるひて餉ニ振掛ケ置餉ならばまし渡し手ニ

のごとく餉ニかけ餉ならば大概の志ら玉ニ一

ぬりごとく右薬ニまぜ餉ならば細末の

まゝ水ニまぜて水ヲ餉ニ掛ケ餉ニ又

をかけ乍ふまするがよろしく水ハ内

六七　諸鳥口気の法之事

一猴の膏（脂）ヲとりて入用　一かくこまの部ヲ出る

一製法甘草

一ごま油
右各細末ゝして何ニても在法用方
右同断ゝ各紫ゝこまの油を一所ニもミまぜるべし
去柱餌ゝこまの油ハ風がくがるべし

六八　諸鳥羽欠の法の事

一早速ゝて両羽を揃ゝとりあつめ
ろくろくかゝ出合申ハしもの
り鉢出をゝしのゝまぜ付申ハ
甲ハ
一黒茶ゝ一鉄粉ハ

六九　諸鳥脚引之薬之事

一小豆一きらげ一肉桂
右各紫ゝ薬粉ゝまぜ水ゝて用但此法ハ
前の法ゝし
七〇　諸鳥足薬之事
一梁師粘一かき成一つ又カ
右三味湯ゝて揉合用
一梁師蒸椿の下の濁りを用
一梅干の肉を用
又法

一シンセヤ　一クハツセキ　一セキカウ　一ニウカウ
各半用ヤ
一右とり草煎じ蓮入洗又ともに甚こゝの製法をもぐ
さ入てうつ
一鉄焼水を用ヤ又糀を入せんじ用右ともに猪口傾
り
右何れも乳ニ付葉ハをべて梅干の肉まぜ好
ム時ニ臨ンで服らるゝおもむきもつて服らるゝ
ゆへ指ニ喰切ともいふ
とも臓ヘ早速治を施すべきもの歟

元ゝを三事ヤ
一月代麻油　一ホルカル油　一アシカノ油　ほふらかうこの葉用ハ
右三色を用
右三油を等分ニ合セ昇気ニ付てうし又おとぎり
草汁油ニ加ヤおまの油ともに四分ニ
七一　諸鳥胴息法の事
一ツバクラノ黒焼　一ホトヽギスノ黒焼
一ツヤカウホ加リンコノ黒焼
一カラグルミ黒焼
右のもの水ニ立て用
右各々ゑんとして飼ヤ何れを当

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

七二　諸鳥をりの薬之事

一もゝそ草　一地志ぼる

右二味かけ干末ニして用ゆ法貝草かく

右薬研ニてきざみ水ニ煎じて飼但ゆりのとく

名相見ドゞじ名バナレニタルコトニコトニヨリド少じタル

ゆへ飼ふ喰事をゝ又もゝそ草ト共の葉ニ

もゝそ藻を水中ニ生ずるものなり　涼ゝ

七三　諸鳥長ざの薬之事

一焼塩を用ゆる事汁の上ずみを飼水ニ入用

一ト里ウ　一ヒツミン子黒焼　一せ芝う草

右三味ゝ粉ニ用又飼の掛まぜ傷ゆり又赤蟇の

ケ干キチユル

右薬研ニて細ニし　合水ニまぜて飼又飼の

ごとく　ゝ傷ゆりと雖ゝ疣ゝ豆の粉ニてをゝ又ゝくる

ゆへ　ゝ赤蟇ゝ有時ハ粉ニまぜ　ゝ差引をゝ事之

又赤蟇ゝげ干ニをゝ細末ニし用ユ

七四　諸鳥つゝる病の法之事　鳥ニ多くある病

一年迷の病治ニハ傷有又ゝ鳥ハ合せ病ゝ

治事有右つゝるハ先蟇の病ニ素人ハ此篇ハナ

カズとて夜に紙のフタうとうそれを嘴
でもなをうれば故鳴れ
してねむり餌をくらひして
クの薬法は水を飲ませ
いふこと此病鳥一旅持
行て病なをるべく心得
七五　諸鳥胸杯折
一荏の生血　又ごまの油
右ふたりいと鳥もねむり
カ又はごまの油にても甚
おきへ一回ふくませ

づく嘴サキ
七六　諸鳥餌ウトミの法の事
一大根ノ実　又大根のシロし汁を用ゐ
右餌ウトミとは餌バすれの事を云右大根の実ま
き餌鳥なれば甚早く餌入ル又ふり名鳥ナラ
餌に甘しふりまぜ用又大根志ぼり汁の水にかへて
ふくませ
七七　諸鳥薫ま事
一せきをする時ハトリ少ハトウガラシ水一茶法日草
一天花粉又一辰砂末一カニ日草ノ

於名ゃがんそそくの類ゃかとして水をほぐして飼を何
れも常ならず其内ニシヤウフるコト白煮菜加味
目方同断ニ又カンゾウ少ニ水を一升ほど用てさし
煮うがら水を一升ニ兎角ニ升ほどもつゝかまてさし

七八　鸚哥風法の事

一風腫有之ハ針を以ふくろ糸ハ梅干の黒焼をさし
行て引通すべし

一肉食又ハ油ものゝ外いてえぶまを飼ハ
飼様更ニ念申ニ及くい事

一水を引ハ冷ハ定飼をさりまち飼を用ゆる事

一餌ハ稗皮をとり粉ニ致ニ而ゆるき節の茶之事

七九　諸鳥飲食之事

一此の外い野の心をもり飼ハ事専要ナり

一油ものゝ外ハ其所の皮をさき竹べらの様なるもの
ニて下の油をとるべし油有之ハ風邪ハ勿論ハきり不申候ハ
ゝ大根葉ハゝがらニ茶を煎る

但し油をとりハ後えぶまをくの外ハ事をし

右中風の鶏ハ鶏の外ハ事をし又ハ
肉を煎じ風ニ用ふる事なり其節
右十金を煎じ茶ニ致ニ而ゆるき鳥をいくらにても

右痰症ニ用ヒ又ハ小兒ノ痘ヲ催ス
痘ヲ出ス
諸鳥鉄砲疵
一人參 一一角 一熊ノ膽 一セキユウ
一土龍 一麝香 血 血ドメニモ用ヒラル
右各等分ニ細末ニシテ用ヒ
疵ノ口ニ付ル
一乳切草ヲ生ニテ用ヒツヨキ時ハ
疵ヲ切テ少シ人參ヲ入諸鳥
疵ヲ治ス

諸鳥薬疱圖

一肉桂 一烏薬 一楊梅皮 一大黄
一枳殻 一甘草 少
右六味ヲ細末ニシテ用ル
加疵ノ口ヲ糸ニテ縫ヒ藥ヲ
ソヽギ縫ヒ事ヲ不ル
右各薬研ニテ能細末ニシテ飯ノ
ノ上ニ置事ヲ久ク蒸シ都テ水ヲ
共ニ水ノ代リニシテ用事ヲ又右疵ヲ
事自然薬ノ如ク口ヲ開キ断ヘ
此薬疱圖ハ何病

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980　ガラス使用

和漢諸島定餌口傳聞書

目錄

一　一鶴
二　一白鳥鳧類バリケン鴛鴦鴨ルイ、鷖、ア
　　ヒル
三　一鷺ルイ
四　一トウマル、志ヤモ、チヤボ、ヨコツケイ
五　一鷸ルイ　一鷸ルイ
六　一ケリ類クイナ、鴫ルイ
七　一鷭、ヒタキ類、小ツバメ、セキレイホル

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

和漢諸鳥定餌口傳書

目錄

一 一鶴
二 一白鳥鳧類、ハリケン鷁鷖、鴨類、鵞、アヒル
三 一鷺ルイ
四 一トウマル、鳥やも、チヤボ、ヨコツケイ
五 一鵠ルイ
六 一ケリ類、クイナ、鴫ルイ
七 一鷭、ヒタキ類、小ツバメ、セキレイ、ホル

八 一ヨシキリ、小ヨシキリ、ヤツガシラ、サイ、ヒガラ、小ガラ、五十カラ、エナガ、目ボソ
九

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号　特1-1980

ガラス使用

り、野駒、蓬莱嶋、鴨、

八　一ヨシキリ、小ヨシキリ、ヤツガシラ、サイヒガラ、小目ボを

九　一木ツヽキ類燕、ルイ、大アリスイ、百舌鳥ルイ小アリスイ

一〇　一大瑠璃、鶯、翁頭鳥、セイチー

一一　一駒鳥、嶋赤髭、雲雀、カワセミ、レンジャク、目白、ツヾイ、田雲雀、山ガラ、四十カラ、ゼンマイ

一二　一相思鳥、ヒンキ鳥、ヒラン鳥、珊瑚、

一三　一菊薫、時鳥、筒鳥、峯カクリ、犬出クイ、イム法鳥、ジヒン、カワクイ、カツカウ、

一四　一栗の餌の外

一五　一荏胡麻餌カ外

一六　一川セミ

一七　一年中飼ルイ分千雀

一八　一鶉

一九　一中風并筋詰病

二〇

二一 一女鳥の事
二二 一支鳥の事
二三 一雪鳥の事
二四 一夜驅スル鳥菜法の事
二五 一油の下過タル鳥見様之事
二六 一鳴鳥飼仕様之事
二七 一米の粉ニガシ拵様之事
二八 一鮒干様の事
二九 一鱧干様の事
三〇 一魚干様の事
三一 一海老ヅル虫の事
三二 一猪餌仕様の事
三三 一下餌の事
三四 一諸鳥合セ粉仕様の事
三五 一白大豆の粉の事
三六 一諸鳥藁の事
三七 一諸鳥肉合見様の事
三八 一諸鳥様子善悪の事
三九 一諸鳥水アビセ様ニ傳の事
四〇 一水アビセ加減の事

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

四一 一吹水の仕方の事
四二 一胸打タル病ニ見様の事
四三 一足氣の病の事
四四 一足氣ニタル病治の事
四五 一口気の病之事
四六 一筋気の病の事
四七 一鼻気の病の事
四八 一胆気の病の事
四九 一羽虫の事
五〇 一庭竈内掃除の事
五一 一ツクレ病の事
五二 一諸鳥目悪敷療治茶法之事
五三 一泊り木之事
五四 一塒の事
五五 一留餌の事
五六 一諸鳥子産時節之事
五七 一糞ヅマリの事
五八 一同茶法の事
五九 一水薫の事
六〇 一雑ルイ

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

六一 一ぐれい
六二 一諸鳥庭籠を揚禄の事
六三 一虫用て餌時節の事
六四 一ケシ黒焼の事
六五 一諸鳥寒暑の心得の事
六六 一法令まがき上る事
六七 一餌離れの事
六八 一唐鳥の事
六九 一和鳥の事
七〇 一和鳥冬水鉢置ルイの事
七一 一唐鳥寒冬水鉢置ルイ并定餌の事
七二 一音呼餌餌の事
七三 一赤毛音呼の矢の事
七四 一和漢鳥類定餌の事
七五 一同捷餌唐鳥の事
七六 一孔雀の子餌立の事
七七 一ぐれ餌拵様の事
七八 一産巣庭籠の心得の事
七九 一文鳥の事
八〇 一諸鳥熱冷の事

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

八四　一王子詰ル島の事
八二　一嶋田島の事
八三　一相思ふの事
八四　一胸ふ餌持ふる事
八五　一同業法の事
八六　一諸ふ餌ふ喰ふ時の事
　　諸島共ニ見ふ能ふ見へて気重節之事
八七　一学の心得の事
八八　一決ふ早ふ仕掛様の事
八九　一類白附子仕様之事

九〇　一秋風の事
九一　一物ふ驚ふる事
九二　一水島替の事
九三　一諸島餌入の事
九四　一諸島一年中餌飼心得の事
九五　一諸島尾胴摺れる時之事
九六　一諸島様子悪敷餌入不喰悪き時の心得
　　の事
九七　一荒島の事
九八　一牧猪防ぐ事

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

九九　一冬ノ寒氣防ク鳥ノ事
一〇〇　一和鳥夜鳥粒餌ノ名諸鳥倒ケノ事
一〇一　一諸鳥不餌上手下ノ心得ノ事
一〇二　一和鳥菓子餌ノ事
一〇三　一雀ノ鳥ノ事
一〇四　一籠ノ事
一〇五　一鶏ノ鳥ノ事
一〇六　一鳥ノ事
一〇七　一別餌ノ仕方ノ事

百〇八　一和鳥ノ難餌鳥ノ傳ノ事
百〇九　一日ガラ、ホゞガラ、ヲナガノ部
百一〇　一四十カラ、山カラ、アイセンガラノ部
百一一　一菊鳳ノ部
百一二　一目ボソ、ホゝジロノ事
百一三　一セン鳥ノ部
百一四　一時鳥ノ部
百一五　一ヒタキ、セキレイ、ホルリ、ホヽバメ鶸駒ノ部
百一六　一三光鳥ノ部
百一七　一大ルリノ部

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

一一八　一鷺の部并附子之事
一一九　一野鳥併付ケ様之事
一二〇　一諸鳥増減併ケ様加減の事
一二一　一時の節餌立の事
一二二　一水イタチの事
一二三　一寒中餌立の事
一二四　一四季水の事
一二五　一鳥トラヘ様の事附り仮打様の事
一二六　一はしき揚様の事附り呉竹揚様の事
一二七　一羽ブリ様の事

一二八　一石砕直し様の事
一二九　一灸針穴の事
一三〇　一予針の事
一三一　一胴気息合の事
一三二　一水アタリの葉之事
一三三　一夜ヲサワキ併節用葉之事
一三四　一毛替り節用葉之事
一三五　一疵ヨリ血出ル葉之事
一三六　一下り気の葉之事
一三七　一下血の葉之事

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

一三八　一足腫ル節附ケ其之事

一三九　一探子悪敷節用ル菜之事

一四〇　一餌喰悪敷節用ル菜之事

和漢諸鳥飼立療治終り

以上

和漢諸鳥定餌口傳聞書

一定餌ト云ハ年中の餌カケヤウ定ル事ヤウ依つて鳥不難ケレドも鳥の勢ひ時分ハ轉なや勢ひ鳥音一ツ下餌二ツ三ツ四ツ五ツ又鳥ホソリあるのり過ま氣をとゝき鳥ホソ下餌拔大しおけ餌筆をはり花を四くなま鳥ホソ下餌の外ミ合く加へ餌事甚重ク悪しくあるべく餌ケ共ホソ拔く餌拔功者とも

一　鶴

一定餌ハ、籾、黒米
右京水分ヲ去テ菜細ク切テ水ヲ加ヘ煮
日ヲ経タル鯉ノ内ノ類ヲ取テ
リテ喜ブ十四五匁宛ヲ
但シ水自分ト
二鳥ハ白鳥、鷹ノ類
ル
一定餌籾稗但シ籾ヲ
右定餌何モ同ジ

ルヲ宛
一鳥ハ冬ノ内三ツ菜ヲ
菜切菜ノ替リ小間ヲ
一鴛鴦鴨類ハ田中ヨリ
又ハ海苔ノ内ノ類ヲ
一水ヲ好ム故ニ池ヲ
鳥ノ為ニヨシ

三　鷸類
一定餌トリヤリ
年中生餌ヲ専ニ

四　トウマル、シヤハ、チヤボ、ヨコツケイ

但し鰡いトウマル、シヤム計りノ外為ニハ不用

一定餌黒米水ニ細かく茱右定餌等ニ交ぜ三日ホド一夜ほど塩湯ニ入しアツ湯ニてもみ洗ひ其の腦をとり捨ふ魚しも其根も水洗ふてとりすて

一日ニ一夜ホド生鰡九の末ニ白焼ふして骨共ニ細かきざみ一羽ニ鰡片身ホド餌ニ混ぜ

一夏之生蠶茶ニけ四五日ホド一夜生中用ふ

五　鸛類

一定餌黒米茱細かく

但ヒタキ類小ハメ鳥に氣の病有
まひたる鳥をに氣有る、赤さゝりの聖鈎なども小豆
粟出る事有る、鶯ヒタキ類ハ蜘蛛ヒツルナの
者ニ鶺鴒類ハ虫類ふるふ虫蚓かのもの又白鶺
鴒印りを飼ニ玉ふ三ト飼てよし又
小り野鶏ハ蚓ばかり多く食ふ者ゆへ
ゟ多く出る事有り
ハ　よし切、せゝかしほそし、きび
ゟ、このゟ、小ゟ、五十ゟ、ゑなか、目白
但千代虫ハ食共ニ柳目白とゝ
ふ

一右何ニを志雀鶸七ト掛中、分飼等
但小ゟ、こゟ、五十ゟ小ゟ掛柳一羽ゟ玉入飼
ニ又小ゟ類ニ蠶を昼ニ玉ふのむ者ゟ丸のまゝて
籠ニ入申ハ定ニてよくいつゝ虫の水物よく
吸ふ事ゟと掛中ゟ玉ニて又きびゟ小ゟし、
せゝかしほそ類ハ其ゟ玉ニ飼てよし、又
虫のたのむ出ゟの鳥ゟとゟ玉ニ
此類ハ白うら薄鳥類ハ
九　木ツゝキ類、小けら、赤けら、同断
蟲鳥類、大体ゟ玉ニ

一右何れも定額鳫ハト時中ハ半分ニ減ス

但鶺鴒ハ何れの季にも減ス

ヤまゐもの虫ハ蜘蛛を好む者ハ又ホヤ〳〵ト鳴

何れも虫ハけら好物多シ細切ニ切たるべら蛸ハきらふ

若し又蚯蚓の鳥ハ何れ吹水をくゞし水曜ゑさ者

なり

一〇 大猫、瑞鳥、黄鳥、菊頭鳥、本名白頭翁

ヒイチイ

右何れも定額鳫ト時中ハ七分ニ減ス

但大ルりハ冥氣出る事有之蚓好むもの

一 駒鳥、鳴駒、赤ヒゲ、雲雀、カヽ天子、百

音鳥、実名百ゼンスヾイ、田雲雀、レンゾヤク

目白

一右何れも定額鳫ト時中ハ

但駒鳥ハ何れも冥氣出る事ハ又駒鳥ハ赤ヒ蚓

好者ゆへ駒鳥ハけらを虫喰申ス又レンゾヤクハとく減

バなれとも其時ニ至りて御都合ニ而御遣

又レン雀ハ虫蛛蛛毛虫抔好ム故ニ又百音鳥カ少

天子ハ雲鳥とも称の雲雀なり何れも鉄砲ニ而

ゑさを聴る又百音ともカヽ天子とも称ス雄子ハ啼ル時

柔毛ある物を食ふべし
（但目白を煮し柿など好又玄米を炊く時吹水の鳥なり）

一二　アイゼン雀、山雀、四雀、せんおり

一右何れも定所はなく、但雀類は兎角胡桃入申いる一切ふくべ入の好剋き虫鉢を好む者なれ共、ちと煮て小さき肉の水を吸ひながら、乾ふり、虫ハ（ほうふり好又蔓を碗水のごとし）一越て小鳥、山雀、ヒガラ、四雀、ゐまおおせ、ん

一三　相思鳥、ヒンキ鳥、ヒン鳥、珊瑚鳥

右何れも定所なく、但相思鳥の餌ハ蚕蛹、蜘蛛、海老が好物なり、又ヒン鳥、珊瑚鳥ハ蜜柑を好む、ヒンキ鳥ハ蜜柑ハ不好、ヒンキ鳥のトンリ（ヒン鳥のトンリ）ハ随分よく称ふも先年中ハ入りける

一四　菊戴、郭公、筒鳥、雀鷹、大虫狼、

右定所ハ雲雀に同じ、何れも柔毛

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

文の米粉ノ
但菊戴ハ冬ノ雪ノ積テモ枯ル
吸水ヲ冬ハ十日程ニ一
少シトウブンヨリ多キ方ヲ
多ク頭ノ面ヲホテラセ
嗽仏法馬、カラス、カラス
鵯ハト時中常ニ餌ヲ
与ル時ハ吸水ヲ
一此鳥ハ何レモ冬火鉢ノ
切リハ冬ハ跳ネ初メ

但菊戴ケル小部ノ鳥ト共ニ
一四 栗乃餌ノ外
頬白、青ジ
琉球渡リ頭鳥
頬赤 深山頬白、
一右定餌ハ
但此外ハ何レモ野ニ
ハ栗ヲ
一六、笹胡麻餌ノ外
まひ、からひ、からこ、糟ひバ

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

まふまて、何ものを、茅くゞる（但大きくゝる
ことゝ
引をしめ、豆廻しまて
一右定師はゝ下時中を四下師へ
但梅よりき時ハそ方ゟ豆廻しまん
麻の実切てゝ何れを強きゟ赤大きゝ
まハ色乳ゟり
一七　ツがしルイ、大虫、鳴、雀のと、鳴むく、
かけす、尾なが、鳴かけす、首玉鳥、
キウクワこ、珊瑚島、珊瑠島、王珊名島、島番はゝ
烏但壽島とゝ
黒九天久、ハルヘル島、白丸

天久、ヤツさん、師屋ラキン、ホムク
右何れを定師はゝ下時中四下師へ
但ツがしルイハ虫ハ野ゟ好ゟ又ムク鳥ルイハ虫各蝕を
好鳴ハ梅ことゝの実野又雀ゝそハ虫
ハ野ゟ好ゟ又雀ゝそハ虫蝕の病虫ゟる事ゟ

一八　川せみ
一日ぐかふかふ定師
右定師の秘ゝハ傳聞書の書や又此書ハ
定師の目方まてゟる。部ふしてゟる書へ
右ふ在りしハ伝ハ定師の実別なゟ一躰ゟ

中更ニ同断ナル鳥ハ
ラ之ヲ

一八 一年中餌掛キヲ
小雀、鷽、ヒタキ類
ヒンキ鳥、ヒラン鳥、

一右何レモ手当同断
但此部ノ鳥ハ餌加減
ニイタス

小鳥、雉鳩、蓮雀鳥、セキレイ類、
鶺、田雲雀、ビヒタイ、

右何レモ同断
但餌袋ノ減ル事ハ何レモ同断ナレ
ドモ冨ニ、峰カラ、赤
ガラ、大虫喰、小虫喰

一右何モ同断
但餌カラ袋ヲ
ヤ

菊戴、ミソサ
目細目白類

一右何モ同断

部分
時
ハ
ン、仏鳥、カックイ、
切

但師称りかけんかうかあるよし
ゟハ病気なるし

朝鯉ふく、鳥春、鳴鳥、
長春花、白頭翁、がビ鳥、白花天久、黄鳥、
白八寿鳥、黒九天久、小ふくろ、八歌鳥、鳴ふく、

一右何れも同断

但此ルイ何れも此部之師の
称り何れも強き鳥なること
青ゃり紀ん、師ゃうきん、首王ゟ、
鳴かけも、かゝ等も

右も是ゟ出ル事
珊瑚鳥名鳥

一右何れも同断

但病なく何れもつよく此ルイハ闘ゟる
とゆう鳥の内何もよく好ゟ
ほゞ升表、大ふう、葉鳴、
ジクトモ

一右何れも同断

但此ゟ升ゟゟ強き鳴鳥、
出ゟ事珍ゟ

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号　特1-1980
ガラス使用

ニ光鳥、珊瑚、ヒイチイ、沖山鶴鶴、レンジャク、大
ミソサヽイ、呼子鳥、燕、
一右何れも同断
但此部ニ出る事有り又泊樹クスキ等
何
雲雀、カヽ天子、百舌鳥、茅雲雀、
多
一右何れも同断
但雨を目当ニ出る事有り
四十から、雀から、アイゼン雀、山から、もがらから雀

むがら、小雀、おなが
一右何れも同断
但此部ニ多く雨出る事あり
木ツキ鳥、青啄木、赤けら、黒けら、大あかけら、
小けらなり、小けら、
一右何れも同断
此、但赤き又目ニ出る事あり
何百鶴ニても同断
但百鶴の内ニ百鶴多く弱し冬ニ入ると
国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

一、始の定師のせよみをもて栗師乃部鳥家に在おも
師の許鳥のれを病えなく強きる事へ定師のか
にに伝なし
鳴乃じ玉、鳴類白、鳴あとじ、珠雀鳥珠石鳥、
まーこ長八以在頭者
一右伝れる栗師之語重類白軽同じ
一岩雀玉えぬるもの是下ろぶを定師之語る
心を軽と飼独同じ
一年中飼御まる分け之也
右方定師の分を中傷聞書終了

一九　鶏
一定師春稗水入かるる
右を中定師之九水入まで細末葉事日を飼
但しおの以籠内ニツカミツて入て日に飼
一籠の掃除者ニ一度以ぜんし
一稗ハ一日ニ升ほかるく下ゼ程充入置多く
入置ハあしく
一夏ハ五六日ニ一度以ぜで吹水まぶし冬ハ暖な
る日ぜまり同申
一毎朝東ゟみハ時分早朝ゟ小書き所へ

賢木空の晨する所となる
一肉羹を該椀するに時分ハ蚘ト云なしてよ
寒餅十四五日を過
一冬ハほんの入坊主暖なる
ゟ夜
但天気能節なれバ日向へ出し
ひるまを日ゟ出るゟとなし
一鶏ハ油掛ゟ馬中へ春稗の外用ゟ事あ
しゟ水し虫刻蚓の類を飼ふ事なし
一鷲ゟ森在胡ゟ新巻用ゟハ稗中飼ひ

てゟ肉なども養ふ事へ春稗を用ゟ而味甲
ゟ事へ肉を主ゟ也
二の 中風邪ニ筋詰ゟ病
一右両様ハ柄ゟ杓ゟ油掛過ゟ馬
なとおゟゟ出ゟ者ハ助清ゟ者又
中風ハ彼の肉羹と風の合ゟい様ふらくいさゝか
一鶏聲善悪ハ麦ゟ要ゟ差別なく鳥形ゟ
ゟ日利ゟれゟし
二一 女鶏ゟ事
一合婦ゟ衆角何れゟ一躰白ゟ内羽ゟ胸ゟ黒

[illegible]

二二　麦鳥の事

一四月頃来る時前のごとく音を早速出す者なり
なり麦鳥の啼ごとき事なり

一麦鳥は白胸赤くいづくにも多くあり其内も白き毛少しなき所を云

二三　雪鳥の事

一雪ごとく飛ぶ頃来る麦鳥形ち時仕廻ごとく
なり依て麦鳥雪鳥又雪ごとく出る事なり
故雪鳥ともいふ

一雪ごとく胸赤き事も麦鳥雪鳥ともに同じ
毛沢山にあり又雪ごとく時を移さず
四月頃迄もあり

一春音出しは雪ごとく方々にて鳴く事赤か
しまでもなく又音甲乙のあるなり

早速なく音を聞ては麦鳥雪鳥の七月末
迄も聞ゆるなり

一肉合最よし其毛を抜き熱湯にて
色付しを又折と合煮にしてじくじくと鳴
鳥をかくのごとくして油かを遣ひ鳴遠き者

より人を驚くに水なとをふ
一八九月頃八野まて菜いろいろ故女鳥を
とるなれ心まて今晩ハ
今日ハ今晩ハいろいろ肉をとりに事ハ
とも事へまて事ハ師まて
一夜ふ一夜語ふ事ふ事ふ
者ハ又焼きふる様ふ心を有一羽ふて留
べし右鳥とハ夜ふ朝まて
寸書ふ事ふ事ふ
一若夜まてふいろふまて

及八九月頃迄ハ夜鍋ハ即吹水まし右鳥共
同断
一鶫ハ雪鳥のかふふし光琳春ふなるもの
暗ふ春日ふ菜水同夜ふも暗ふいふ面ふ
ふて朝ふ取ふ仕別早ふまて
六四ふ頃迄日ふまふふ芽ふの事
二四 夜騒ふふ芽ふの事
一ニニヤ 一天花粉 右者ふまて製法前件加水ふ
ふて例ふし
一鶫小形ふそびふ鳴ハ者ふ事高ふ降ふ時ハ

一 鵜云ふ寒き夜にて多くの小魚を呑ふくるしさうなる気色人なれバ是ハ是ハと取り捨る事

二ツ 油かゝり過ぎたる羽を撮る事

一毛逆立羽なども有れバ一躰の鳥をもそこなひ申事有之其節ハ鳥籠の内へ水を霧吹きにて両羽かいの下せをじ通り首まで通て頂戴のごとくし吹て尺ぐし右之通ぬらかす事ハ油のかゝりたる所ハ黄色

ま油とも有之場所ハ利かず肉へ入らざる様撮る事

ま薄皮等切ざる竹べらにて油ぬりの毛並を揃ふ事

葉煙草針にて抜く如く曲りの有る毛を揃ふ事

但此塗薬法ハ普請之日向國高陽山有之

右之通ぬる事

一油ぬり過ぎたる時ハ土を少々ウカラに水を加又ハ

小木根葉等ハく水ものにて同事ニ

一吸水いくらにても水龍いのうふくろ砂ニ

ハ夜留りいま鳥のうちハ

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号　特1-1980
ガラス使用

一常水をよく吸鵜の腹中にて其色の六七
日も招餌を付置し
一ふいくとあくびをするの
鳥七ツ目も招餌を付置し
二六 鵜の目も稼を事
一女鳥計男鳥のそばへをよせ其かけまて笛を吹ふきいれ
事
但し表面に雪をちらし心もち雪を雛をふり
細く君とふくなるをも合の笛を
吹ふきまぐれ鳥が別てよし簡よ
隠置

二七 来のあらし掛稽古の事
黒米三斗雑米
一米をはらくとそだきたる才孫色よき雑米を結
しめりの取る米まで米にて一所石臼をひき挽ふ
ふるまで細よふふ
但右加し糠也上米三斗の割合
ふるまでの諸色不用甲ごと又六ツ立の諸鳥
一鵜黒米常よりおろし者の鳥の為よろしく
一常より心を付置し者の鳥の為よろしく
看なる又米黒く色の替りの様に煎るい悪く来

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号　特1-1980

ガラス使用

四〇　鵟干様の事

一生鳥死鵟と云ふ物うろくと鵟と似たるの一ツにてこしの内ふくいろし黒羽狐色にて

但右の鵟天気能節分篇の上にて手の事こゝに斯掛年中助用に生鳥切能同断

一鵟干餌をつるいて下薬と号前よりまぶ右のごとくたゞ生鳥切能同断

一受生鳥用る事まず海老づる其後ゟ細き切餌のよな里餌也

但此虫ゟ鵟両虫ハ清島ゟ甲て甚よし薄ハ生ゟ年中助

一梁の茎持ち葉けりつるみそり鉢へ入ゟ

一て強き中へまりて用るなり先生を頭と羽を

取る也

三一　海老つる虫の事

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用

三二　摺餌仕様之事

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980　ガラス使用

下餌之事

一常多餌と言ふは下餌をなす米の粉をなす事
也ハト餌と言ふは下餌ハト米の粉をなす事や五
ト餌とよぶハ下餌也ト米の粉をなす事なり其
余ハ是をもて知るべし

三四　諸鳥合せ粉仕方之事

一右右の如くつかね置ハよきものうくるの定餌をこの
ける今ときて其ほど米をも下餌と下餌ハまぜもと合
ゆるをもて引てキ又餌ともふるゝ心用也

但し常合せ粉よりてうる時ハ
ころ〳〵からんをハ道中ハなどくさしてる時の用
捨をもの時の事なり又火事などのせる是補法
を

三五　白大豆の粉之事

一白大豆の粉ハ壽里餌の諸鳥肉養ふる。常未の
粉不叶ふ大豆の粉をかくべし大豆の粉三下位なてこし
法を行ふ

但米の粉をもちゐるもよし

兎角七ト言ふ前合せ置ハ内

八用甲
但大豆の粉末かし交せ合てとき施与
一年中飼ひ列てとしし

三六　諸鳥糞の事

一拇指のまくする糞を腹のまわりの毛の
の上に

ヒキカヘ　製法甘州

右二味細末して水のまじりて用ひ
一糞白くなりまくまきて時々鳥栖子不宜少許
製して又其時鳥を風息して腹まで息はさせ

ひて甚だ鳥息をして糞ひまきて胸息
一諸鳥小さきものよりも糞赤色なり
なれども胸息するは甚だ少なし
一諸鳥ともに糞ひまきて此如き事々
なく糞ひまきて胸息するは甚だ少なし
事なり物鷙き胸息の事は甚だ胡
麻油又は椿油又は胡麻油又は胸
ひまきて刻限違ふ事なし油にて
ひまきて刻限違ふ事なし油にて
ひまきて刻限違ふ事なし油にて

…下酢を少し軽く
…べし

三七　諸鳥肉合足様の事

一肉羹ともをよく煮ゆるを…鳥許を残しそれをよく…肢の毛を…
…落ちる鳥の股牛も…牛の骨高くとも…

肉合ともまるい股丸し

三八　諸鳥料理善悪之秘の事

一肉羹ともよろしからずや…の月の廻り…の肉羹用ふべからず…

…ず煮ゆるや…
…ゆるを知る…
…あしく生ずるの水

…ゆるや…
…ゆるを知る…
…あしく生ずるの水

…ゆるや…
…ゆるを知る…
…あしく生ずるの水

…

不苦又八四吾支一夜暖なる日有事
一小說へ招り(ねむり)薬石を有ときハ水かゆの方を高く上げ
ハいとよろしつる者なり
一音事おいれを妻ものハ一夜月を
もちて水ゲけるものなり
一夫鳥おいて孔雀白鵬金鶏雉子鶴
右何を妻ともハ日ニ一夜吹水をも先
暖なる節折をも事れ通號へ入ものハ吹水を
乃
一唐もの内ともを鳥吐いれ思鳥キウセ、黄鳥おい

水かちて水あひせいれ
お妻ものハ日ニ一夜用事
一諸鳥少ともを塒ものて時雨の差かなく
日ニ水何ひも事の御諸鳥少ともを塒中針毛の無き
世界小水あるく共節小ニ三日ニ一夜ともをしも豆
食ものも鳥おいも水あひせともを入豆日ニ水をも
しい水あひて御ろ人ついて水を引べし
一ハし諸鳥の内ともを鳥少ニ沈中ハ折れ塒よりさし
入い者故塒ものをいれてハよやそのイきハまひ八百水
ひせ事い事ニ花暗除而日ニ一夜風ふて通

国立国会図書館　タイトル『和漢諸鳥秘伝録』　請求記号 特1-1980
ガラス使用